# 『聯邦志略』と『海國圖志』、新島襄が読んだのはどちらか

大　越　哲　仁

## はじめに

2019（令和元）年8月3日の同志社大学同志社社史資料センター第一部門研究一日研究会で私は「新島襄の政法思想」と題する研究報告を行った。

その報告の中で私は、江戸期の新島がアメリカ大統領制を学んで感銘を受けた中国語の書籍が、従来説の『聯邦志略（連邦志略）』ではなく『海國圖志（海国図志）』であったこと、そしてそれを読んだのが従来説の1863（文久3）年ではなくて1859（安政6）年であることを論じ、研究会参加者から「面白い発表である」と評価を頂いた。

私が論じたこれらの点は、新島研究に於いても非常に重要な点である一方で、同研究会での私の報告は、一部認識の違いもあったので本論で改めてこれらの点を論じることとする。

## 1. “An Atlas of United States of North America”の衝撃

新島の「政法思想」において、最初に彼が衝撃を受けたのが、「中国語で書かれた北米の合衆国の地理書（An atlas of United States of North America, which was written with China）」だった。

ここでいう、「政法」思想とは、「政治」思想と「法」思想という二つの意味概念を合わせた私の造語などではなく、新島の生前当時「政法」という言葉があって、それには「政治の方法」、「世を治める方法（統治方法）」、「政道（施政の方法）」という意味があった。新島逝去直後の1890（明治23）年の「同志社社員会記録」にも、設置予定の大学には「当分之内ハ理財〔経

済〕政治之二課ヲ置ク事」[1]が決まった後、これを「政法学部」と呼んだり、「政法学校」と呼んだりした例が散見される[2]。このような意味の「政法思想」は、政治制度の構成原理や政治機構、政治の運用に関する思想と言ってもよい。

このような意味の「政法思想」すなわち、「世を治める方法（統治方法、政治機構）」に関する思想に関して、新島の意識の中で最初に彼が非常な感銘を受けたのが、「中国語で書かれた北米の合衆国の地理書」だったのである。

1865年11月、新島がアメリカ入国直後に英文で認めて、ハーディー夫妻に提出し、夫妻がその手記を読んで彼を庇護することの契機となった、いわゆる「脱国の理由書」には、その時の衝撃が生々しく書かれている。

> "I was born in a house of a prince [Itakura] in Yedo. My father was writing-master of the prince's house and his writer, and my grandfather was an officer of whole, the prince's servant. I began to learn Japan, and China too, from six years age, but at eleven years age my mind had changed quite to learn sword-exercise and riding horse. At sixteen years age my desire was deepened to learn China and cast away sword-exercise and other things. But my prince picked me up to write his daily book, although it would not have been my desire. I was obliged to go up his office one another day, and I must teach small boys and girls too, instead my father at home. Therefore I could not get in China school to learn China, but I read every night at home. A day my comrade lent me an atlas of United States of North America, which was written with China letter by some American minister. I read it many times, and I was wondered so much as my brain would melted out from my head, picking out President, Building, Free School, Poor House, House of Correction, and machine-working, etc. And I thought that a governor of out country must be as President of the United States. And I murmured myself that, O Governor of Japan! why you keep down us as a dog or pig? We are people of Japan, If you govern us you must love us as your chil-

dren. From that time I wished to Learn American knowledge, but alas, I could not get any teacher to learn it. Although I would not like to learn Holland, I was obliged to learn it because many of my countrymen understood to read it. Every one another day I went to my master's house to learn it."[3]
(下線部引用者)

下線部に関して先行研究者である北垣宗治氏の翻訳文[4]を参考にして拙訳したのが次の文章である。

ある日、勉強仲間の一人が北米の合衆国の地図書を貸してくれました。それは或るアメリカの聖職者が漢文で書いたもので、私は、繰り返しそれを読みました、すると、私は驚嘆のあまり、私の脳みそが頭からとろけ出そうな気がしました。大統領を選ぶこと、ビルディング、無月謝学校、貧救院、感化院、機械工場、等々。そして、私は考えました。日本の統治者もアメリカの大統領のようにならなければならない、と。そして、私は私自身つぶやきました。ああ、日本の統治者よ！なぜあなたは我々を犬やブタのように虐げるのですか？我々は日本の人民です。あなたが我々を統治しようとするならば、あなたは我々を我が子のように愛さなければなりません。その時以来、私はアメリカに関する知識を学ぶことを熱望しました。しかし、悲しいことに、それを教えてくれる教師はどこにもいません。私はオランダ語を勉強したいとは思わなかったけれども、それを勉強しないわけにはいきませんでした。なぜなら私の国では多くの者がオランダ語を読めたからです。一日おきに私は蘭学教師の家に通いました。

新島は、アメリカ合衆国の概要を知り、特に民選による大統領制に心を動かされた。そして自分の国である日本の為政者も米国の大統領のような存在にならなければならない、と考え、アメリカに関する知識を学ぶことを切望し、それがオランダ語の勉強を始めた契機となった、と綴るのである。

ここで問題になるのは、「中国語で書かれた北米の合衆国の地理書」とは具体的になんという本か、そして新島はそれをいつ読んだか、という2点である。

## 2. 従来説：読んだ本＝『聯邦志略』、読んだ年＝1863（文久3）年

まず、この書については、1885年に新島自身がハーディー夫妻に贈った手記・"Brief Narrative of My Younger day（「私の青春時代」）"で"a historical geography of the United States written by the Rev. Dr. Bridgman of the North China（北中国伝道団の宣教師であるブリッジマン博士が執筆した合衆国の歴史地理書）"[5]と説明している。

また、新島の評伝執筆者であるArthur Sherburne Hardyは、この書について"a History of the United States written by Dr. Bridgman, of Shanghai, in China. After Dr. Bridgman's death, his widow visited Dr. Brown, in Yokohama, and left with him a few copies of her husband's history, which were distributed by the Dr. Brown. It was doubtless one of these copies which fell into Neesima's hands."[6]と述べる。ブリッジマンの逝去後に未亡人が横浜のブラウンを訪ね、その時にブラウンに渡した数冊の夫の遺作の一つが新島に渡った、というのである。

それらのことから、この書は、先行研究ではブリッジマン（Elijhah Coleman Bridgman, 1801-1861）が執筆した『聯邦志略』であるとされてきた[7]。

また、新島がこの書を読んだ時期については、上記の「私の青年時代」には、新島が様式帆船の快風丸で玉島に航海に行った後に一友人から借りて読んだという趣旨の内容が述べられている。その時、新島は、その本以外にも「中国におけるイギリスの宣教師のあらわした簡単な世界史」と「ウィリアムソン博士の小雑誌」と「シャンハイかホンコンで発行された二、三冊のキリスト教の書物」もその友人から借りたと述べる[8]。

新島が玉島に行ったのは、1863年1月31日（陰暦1862年11月12日）～3月3日（陰暦1863年1月14日）だから[9]、新島が同書を読んだのは、

1863（文久3）年3月以降（かつ、箱館行きを決意した1864年4月以前）となる。そのため、同志社の公式な出版物でも、新島がこの本を読んだのは1863年とされているのである[10]。

## 3. 従来説に対する批判（1） 1859（安政6）年遡及説

上記の通り、従来説は1885（明治18）年に新島が書いた手記・「私の青春時代」を元にしたものだが、その説で一番問題なのは、この手記には、上述したような合衆国の歴史地理書の簡単な書誌的記述はあっても、その本の内容や、新島がその本によってアメリカ大統領制に対して感動したことなどが一切書かれていないことである。彼のその手記では、その時に借りた他のキリスト教の本によって新島が創造者や「天父」を知ったことに重点が置かれている。アメリカの大統領制について感銘を受けたという記述は1865（慶応元）年の「脱国の理由書」だけに書かれているのである。

一方、「脱国の理由書」では、その本を読んだことを契機にオランダ語を学ぼうと蘭学教師の家に通いはじめた、と述べる。それは、新島によれば、当時の江戸では、は英学が未だ学べなかったからであった。

また、同じ「脱国の理由書」には、その本を読んだことを契機に新島は外国の知識を学ぶ意欲が急激に高まり、藩主[11]から叱責を受けてもオランダ語の勉強を止めなかったことが綴られている[12]。

そして、その後に新島は、江戸湾でオランダの軍艦の威容を見て「日本も海軍を作らなくてはならぬ」、「われわれは外国に出掛けていって、通商の仕方を覚えなくてはならぬ」、海外渡航を禁じた国法に対して「どうしてわれわれは籠の鳥、袋のネズミどうぜんであるのか。そうだ、われわれはそんな野蛮な政府は倒さなければならぬ。アメリカ合衆国のように大統領を選ばなくてはならない」と決意し、その時以来、彼は軍艦操練所に週三回通って航海術を学ぶことになった」と「脱国の理由書」に綴るのである[13]。

以上、「脱国の理由書」に従えば、編年史的順序として彼は次のような行動をとっている。

①北米の合衆国の地図書を読んでアメリカの大統領制に大きな感銘を受ける ⇒
②オランダ語の勉強を始める ⇒
③江戸湾でオランダの軍艦の威容を見る ⇒
④軍艦操練所に入る

一方、「私の青春時代」では、新島は、オランダ語の数学を学ぶために「軍艦操練所に通う気になり、そこで数学の初歩を学んだ」と述べた後に続けて「或る日のこと私はたまたま江戸湾べりの海岸を歩いていたとき、オランダの軍艦停泊しているのをみつけた…」と綴っている[14]。

そこまでを読むと、「私の青春時代」では、新島が江戸湾でオランダの軍艦を見たのは、彼が海軍操練所に入学した後のように思われる。

しかし、新島のこの文章を精読すると、オランダの軍艦を見たことから、彼が、日本も海軍を持つべきであること、外国貿易を促進するために洋式船を建造することを考えた上、"This new idea prompted me to pursue the study of navigation" [15]と述べていることから、このような新しい考えが彼を操練所で学ぶことに駆り立てた、というのであって、それは軍艦操練所入所への入所の契機となった出来事なのであった。したがって、「私の青春時代」でも、オランダの軍艦を見た後に軍艦操練所で学んだことを述べているから、その順序は、「脱国の理由書」と同じなのであった。

さらに、「私の青春時代」には注目すべき記述がある。それは、新島の父が藩主に随行して大阪に派遣されている間、新島は父の塾を委ねられ、藩主からも江戸藩邸で書記（祐筆）役を命ぜられて「家と藩邸とでの二重の義務に大いに多忙をきわめていた間に、ヨーロッパ諸国のことを知りたいという新たな欲求が起こり、ほとんど耐えがたいほどになった。当時ではオランダ語が私たちの学びうる唯一のヨーロッパ語だった。私は家から一マイル以内のところによいオランダ語の先生を見つけた。私はたくさんの義務にしばられてはいたが、できるだけ暇を見つけてそこへ通うのが常であった」という文章である[16]。

新島が軍艦操練所に通い始めたのは 1860（万延元）年 12 月（陰暦 11 月）

だが[17]、新島の父民治が藩主に随行して大阪に赴くのは、その前年の1859（安政6）年（陽暦5月）である[18]。

「私の青春時代」には、どうして1859年の藩主と父が大阪に赴任中にヨーロッパ諸国のことを知りたいという「ほとんど耐えがたい」程の新たな欲求が新島の心中に起こったのか、その理由は書かれていない。しかし、その欲求のために当時学びうる唯一のヨーロッパ語であるオランダ語を新たに学び始めたという記述は、「脱国の理由書」におけるオランダ語学習の契機と同じであるから、「新たな欲求」が生じた原因は、中国語で書かれた合衆国の歴史地理書をこの時に読んだためであることが示唆される。

したがって、「脱国の理由書」の記述と「私の青春時代」の示唆を総合的に判断すると、新島は、1859年の藩主と父の大阪赴任中に北米の地理書に邂逅してアメリカの大統領制に感銘を受けたことが明らかになる。すなわち、従来説の1863年説と異なり、新島はその4年も前の1859年に北米合衆国の地理書を読んでいたのである。しかし、それでも、「私の青春時代」には、1863年頃に新島が同一の友人から他の中国語で書かれた書籍と共に合衆国の歴史地理書を借りたことが述べられているのはなぜなのか。

この点に関しては北垣宗治氏が先行研究で次のように述べている。

「私の見解はこうである。おそらく（A）「脱国の理由書：著者注」の方が起こった出来事の順序に忠実であった。（中略）つまり『聯邦志略』は新島に理想国を垣間見させ、政治的な開眼をさせた。このことと、天地万物の造り主で、イエス・キリストの父なる神の発見、したがって新島自身の実存的な自己発見は、〔1865年の〕二十二歳の段階ではあくまで別の次元で捉えられていた。ところが〔1885（明治18）年の〕四十二歳の段階ではこの二つの次元は総合的に把握されている。止揚されているといってもよい」と[19]。

私も北垣氏の意見に賛同するが、さらにいえば、「私の青春時代」が掲載されているArthur Sherburne Hardyの*LIFE AND LETTERS OF JOSEPH HARDY NEESIMA*の原書を見ると、「私の青春時代」の記述はすべて段落毎にその冒頭に引用符（「“」）が付されている[20]。それは引用文だからではあろうが、全文を正確に引用しているなら最初の段落の頭と最後の段落の文末、すなわち引用した文章全体に「“」と「”」を付ければよいとも思われ、

編集者が新島の手記の原文の順序や文節の部分的削除など、手を加えているような印象も残る。新島の手記の原文の発見が望まれる。

なお、事実としては、新島は1856（安政3）年、藩主・板倉勝明の命により蘭学を始めていたが、漢学と蘭学の両立が困難だとして翌年には蘭学を廃して漢学に傾注している[21]。蘭学を本格的に学習し始めたのは、1859（安政6）年であった[22]。さらに、幕府の蕃書調所は1857（安政4）年に開所されたが、1862（文久2）年に洋書調所、1863（文久3）年には開成所と改称、洋書調所と改称された頃からオランダ語のほかに英語・フランス語・ドイツ語なども教授されるようになった[23]。そして新島自身は、1863年5月頃には英文法を研究して「英吉利文典直訳」を纏めている[24]。したがって、通説の1863年には、新島は英語を学べる環境下にあり、実際に英語を学んでいるのである。そのこともまた、従来説の1863年説は、新島が英語を学べる環境になかった時に中国語で書かれた合衆国の歴史地理書と出会ったという新島の記述に反する。

新島は1859年に中国語で書かれた合衆国の歴史書に出会ったのであった。

## 4. 従来説に対する批判（2）『聯邦志略』は時期的にあり得ない

それでは次に、新島が読んだ合衆国の歴史地理書が本当に『聯邦志略』だったのかを検討したい。

いわゆる『聯邦志略』は、Elijah Coleman Bridgeman（1801-1861）が、中国名裨治文として中国語で書いたアメリカ合衆国の歴史地理書である。彼自身が名付けた書名は、下記のように、改版毎に『美理哥合省國志畧』、『亜美理駕合衆國志畧』、『大美聯邦志畧』と若干変化がある。

Bridgemanは、アーモスト大学、アンドーヴァー神学校を卒業し、アメリカン・ボードの一員として中国に最初に赴任した宣教師であった[25]。

『新島研究』第110号の坂本恵子氏の論考「聯邦志略を読む」によれば、いわゆる『聯邦志略』は、次のように1838年に初版が出版されてから、タイトル、内容、印刷所を変えながら数回再販されている[26]。

(a) 1838 年、『美理哥合省國志畧』、シンガポールで出版
(a) の重刊、『亜墨理格合衆國志畧』、1844 年香港で出版
(b) 1846 年、『亜美理駕合衆國志畧』
(c) 1861 年、『大美聯邦志畧』、上海で出版
(d) 1861 年、『聯邦志略』、江戸で出版された和刻訓点本
(e) 1864 年、『聯邦志略』、江戸で出版
(f) 1871 年、『聯邦志略』、日本で出版
(g) 1874 年、『聯邦志略』、日本で出版
(h) 刊行年不明、『聯邦志略』、日本で出版

坂本氏によれば、このうちの（c、1861 年上海版）の中で、裨治文（Bridgeman）は、「（初版から）20 年余り経って、原版が散失しどうしようもない。（略）やむを得ず初稿を探した。中国の友宋君と初稿をもとにして地球等の図を付け加えたり書き改めたりして改定した」と述べている[27]。そのことから坂本氏は、（(c) の刊行時点で）「初版（1838 年）の原版は散失し、初稿しか残っていないので、初版、1844 年版、1846 年版を新島が手にすることは不可能である」[28]と判定される。

ただ、この点に関しては、『聯邦志略』は 1853 年に初めて中国から日本に輸入された、とする先行研究がある。井上勝也氏の著書には、「佐渡谷重信氏と木村毅氏はおよそ次のように書いている。『連邦志略』は 1853 年初めて中国から我が国に輸入された簡単なアメリカ史であるが、この中に「アメリカ独立宣言文」の要約が紹介されており、この『連邦志略』を佐久間象山、吉田松陰、安井息軒、横井小楠、橋本佐内などがあらそって読み、世界的知識を得た」と紹介されているのである[29]。

しかし、今日、横井小楠や佐久間象山が西洋知識を得たのは『海國圖志』からであることが明らかになっている。

横井の場合だが、彼が福井藩士村田己三郎に宛てた書簡に『海國圖志』の書名が登場する[30]。横井小楠の研究者である圭室諦成氏によれば、横井の門下生の内藤泰吉は『北窓閑話』で次のように述べているという。「安政二〔1855〕年〔横井〕先生は海国図説〔志〕によりいよいよ開国を主張さるる

ことになった。おれを相手に毎日談がはじまる。昼食を忘れたことが百日も続いた」。その『海國圖志』が日本に輸入されたのは 1853（嘉永 6）年である[31]。

佐久間象山の場合については、源了圓氏がその詳細をまとめている[32]。

また、『聯邦志略』に関する上記の佐渡谷氏と木村氏の引用文での「佐久間象山、吉田松陰、安井息軒、横井小楠、橋本佐内などがあらそって読み」という箇所だが、1925 年刊行（1929 年増訂改版）の尾佐竹猛著『増補　維新前後に於ける立憲思想』（前編）に、「〔『海國圖志』は〕漢文の世界地理書として、当時第一の良書であったから、嘉永安政の交、佐久間象山、吉田松陰、安井息軒、横井小楠、橋本佐内等を始め、外交を論じ、海外に志あるものは、競ふて之を読んだ」と記述されていて[33]、その文章に登場する人物の名前も人数も順序も一致している。つまり、先行研究を踏襲する中で引用する書名が入れ替わってしまったかのようにも思われるのである。

したがって、『聯邦志略』は、坂本氏の指摘通り、1861（文久元）年以降日本で読まれるようになったと考えて間違いが無い。そうすると、刊行時期的に新島は 1859 年には同書を読むことができないから、1859（安政 6）年に新島が読んだ中国語のアメリカ合衆国の地理書は『聯邦志略』ではなかったと結論づけられる。

## 5. 新島が読んだのは『海國圖志』だった

そうすると、いったい 1859（安政 6）年に新島が読んだ本は何だったのか。そして、その本に対して、新島自身が「私の青春時代」の中で、それは「北中国伝道団の宣教師であるブリッジマン博士が執筆した合衆国の歴史地理書」だと説明したのはなぜなのか。

私の結論は、新島が読んだ本は『海國圖志』のアメリカ編（北米編）であったということである。なお、『海國圖志』の「海國」とは大洋別の国々、「圖志」とは、図の入った書き物（誌）のことである。

『海國圖志』は、従来説としては、1838（清国歴；道光 18）年にブリッジマンがシンガポールで『萬国地理書』を刊行し、それを 1842（道光 22）年

に林則徐が漢訳させ、魏源が諸書輯録して『海國圖志』として出版。1847（道光27）年に増補出版された、とされていた。これは、前述の尾佐竹の著書に記載されている内容で、この説は各書で踏襲され、私も今夏の社史資料センター第一部門研究一日研究会でこの記述に基づき研究報告を行った。

しかし、最近の研究によると、事実は次のとおりである。

1838年、Hugh Murray の *An Encyclopaedia of Comprising a Complete Description of the Earth, Physical, Statistical, and Political.* London, 1834. 3 Vols. の概略を林則徐が袁徳輝等に銘じて翻訳させて『四州志』と名付けた本を藍本とし、この本を林則徐の依頼によって魏源がさらに増補して1842年に『海國圖志』全50巻として刊行。その後、1847年に増補改訂して60巻物として刊行されたが、魏源はその後も改定増補を続けて1852（清国暦；咸豊2）年に百巻本を出し、これを底本にした。この際、ポルトガル人瑪吉士の『地理備要』ならびにブリッマンの『合省図志〔『美理哥合省國志畧』〕によって増補した[34)]。

そして、日本には、1851（嘉永4）年に初めて3部輸入されたが、「御禁制之文句有之」に就き幕府内に納められた[35)]。1854（嘉永7）年にはじめて輸入が許可されたが、同年から直ちに複数の翻刻版が発行され、嘉永から安政年間にかけてその種類は23種に及ぶという[36)]。

ただし、日本で翻刻の対象となった巻は網羅的ではなく、重要と思われる国に関して重点的に翻刻されたようであり、アメリカが中心だった[37)]。

それもあってであろう、実は、先に紹介した横井小楠の村田宛の書簡の中で横井は、『海國圖志』の内容に関して次のように論評している。「近代翻刻の海国図志、アメリカの部はその国志に因って著わし候間、よほど明白にこれあり候えども、魯西亜などは殊のほか大略にて、事情を得申さざる事かと存ぜられ候」と[38)]。翻刻された『海國圖志』の「アメリカの部はその国志に因って著わし候間、よほど明白にこれあり候」とは、アメリカの部はブリッジマンの『美理哥合省國志畧』によって著述されているから詳しく書かれている、という意味である。

実際に早稲田大学収蔵の『海國圖志』100巻本の中の『海國図志』、巻六十之　六十二「外大西洋　彌利堅国即育奈士迭国〔メリケン国すなわちユナ

イテッド国総記」には、「一人の綜宗」は「四年以て一任期と為す」、「綜宗」は「世襲終身之事無く」、「公挙」で（選ばれる）、同国には「貧館、育孤〔児〕館、医館、瘋癲館等又各設義学館」があるとあり、新島が衝撃を受けた内容のほとんどがこのページに掲載されているのである。

以上によって、新島が1859（安政6）年に読んだのは『海國圖志』のアメリカの部であり、その部は、ブリッジマンの『美理哥合省國志畧』を取り入

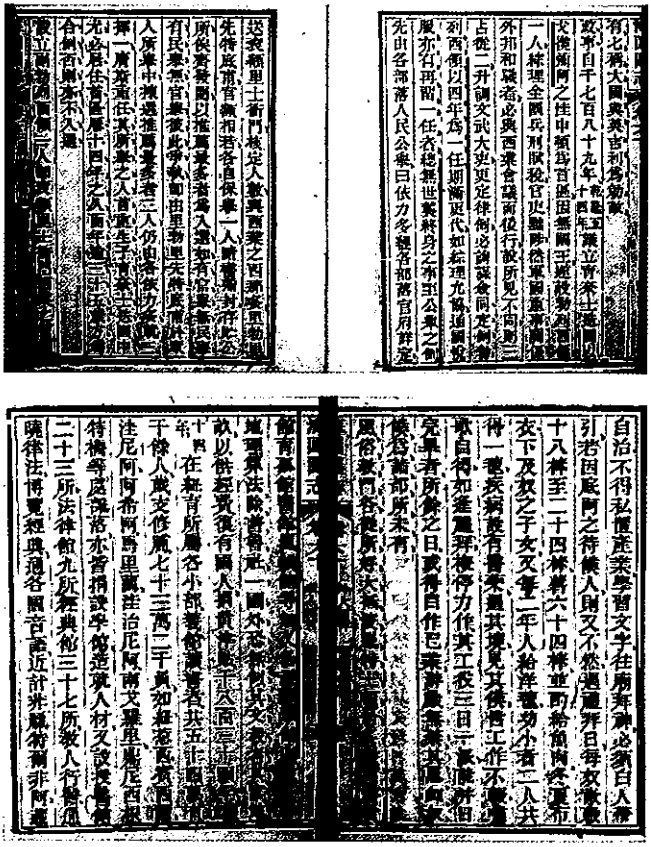

図1 『海國圖志』（百巻本、巻六十之 六十二）
「外大西洋 彌利堅国即育奈士迭国総記」（傍線本稿筆者）

れたものであったことが明らかになるのである。そしておそらく、新島が読んだものは翻刻版のアメリカの部であろう。これに関する詳細な検討は今後の研究課題としたい。

## 6. 結びにかえて－新島襄　近代日本の先覚者－

本論考では、新島襄は1859年17歳の頃に『海國圖志』を読んでアメリカ大統領制に憧れ、幕府の統治に対して非常な憤りを感じたことを論じた。

先に述べた通り横井小楠は、1855年に『海國圖志』を読んだことが海国論に転じる契機となったが、彼がそれを文章にまとめたのは、1860年の「国是三論」であつた。横井は、その文章の中で「アメリカではワシントン以来三大方針を立てたが、その第一は、天地の間に殺し合いほど悲惨なことはないので世界中の戦争を止めさせるというのである。第二は、世界万国から知識を集めて政治を豊かにすること。第三は、大統領の権力を世襲するのではなくて、賢人を選んでこれに譲ることである。これによって君臣の関係がなくなり、政治は公共和平をめざし、法律制度から機械技術にいたるまで地球上の善いものはみな採用し活用するという理想的な政治が行われている」と述べる[39]。

一方、福沢諭吉は、1859年に横浜見物をした際に、外国人に対してオランダ語を用いたが全く通じなかったことを契機に英語に転向し、英蘭対訳の辞書を頼りに独学で英語を学び始めた[40]。その福沢が、翌1860年に咸臨丸で渡米した際に、「(アメリカで) 今ワシントンの子孫は如何なっているかと尋ねたところが、その人の言うに、ワシントンの子孫には女がある筈だ、今如何しているか知らないが、何でも誰かの内室になっている様子だと如何にも冷淡な答えで、何とも思って居らぬ。これは不思議だ。勿論私もアメリカは共和国、大統領は四年交代ということは百も承知のことながら、ワシントンの子孫といえば大変な者に違いないと思うたのは、此方の脳中には、源頼朝、徳川家康というような考えがあって、ソレから割出して聞いたところが、今の通りの答に驚いて、これは不思議と思うたことは今でも能く覚えている。理学上のことについては少しも肝を潰すということはなかったが、一

方の社会上のことについては全く方角が付かなかった」と回想した[41)]。

1859～60年頃、50～51歳の横井小楠と、横井よりも三十歳以上年下だった17～18歳の新島は、アメリカとその大統領制に対してそれぞれ理想を抱いた。二人は、自分事として日本の現実政治の中にアメリカ大統領制を投影したのである。

他方、新島より9歳年上の福沢はアメリカの大統領制は他国のことで日本人には理解のできないものであると考えた。アメリカ大統領は福沢にとって他人事なのであり、そこには日本の政治に関する問題意識は伺えない。

私は、新島の見識を褒めそやそうとしているわけではない。

しかし、1859～60年頃の同時期に於ける新島・横井・福沢それぞれの思想を比較すると、新島は、横井や福沢と比肩できる近代日本の優れた先覚者であったとの認識を新たにするのである。

参考文献

1）上野直蔵『同志社百年史資料編二』（同志社、1979年）、p.1272
2）同書 pp.1272-1277
3）Arthur Sherburne Hardy, *LIFE AND LETTERS OF JOSEPH HARDY NEESIMA* (Houghton, Mifflin, 1891), pp.3-4
4）新島襄全集編集委員会編『新島襄全集』第10巻（同朋舎出版、1985年）、pp.11-12
5）Hardy, *op.cit.* p.30
6）Ibid., pp.3-4
7）たとえば、井上勝也『新島襄　人と思想』（晃洋書房、1990年）、pp.253-254
8）『新島襄全集』第10巻、p.37
9）新島襄全集編集委員会編『新島襄全集』第8巻（年譜編、同朋舎出版、1992年）の記載を本論執筆者である筆者が陽暦に読み替えた。
10）たとえば、同志社編『新島襄自伝－手記・紀行文・日記』（岩波文庫、2013年）、p.406
11）北垣宗治氏は、藩主ではなく藩の上役であったと理解するのが妥当であると指摘されている（北垣宗治『新島襄とアーモスト大学』（山口書店、1993年）p.126）。
12）『新島襄全集』第10巻、pp.12-14

13) 同書 pp.14-15
14) 同書 p.35
15) 同書 p.28
16) 同書 p.33
17)『新島襄全集』第 8 巻、p.10
18) 同書、p.9
19) 北垣前掲書 pp.121-122
20) 同書, pp.13-45
21) 新島襄全集編集委員会『新島襄全集』第 3 巻（同朋舎出版、1987 年）、p.5
22)『新島襄全集』第 8 巻、p.10
23) 斉藤信『日本におけるオランダ語研究の歴史』（大学書林、1985 年）、p.217
24) 新島遺品庫収蔵目録番号上 0841
25) 井上前掲書、p.254
26) 坂本恵子「聯邦志略を読む」『新島研究』（第 110 号）（同志社大学同志社社史資料センター、2019 年）、pp.124-128
27) 同論文、p.125-126
28) 同論文、p.128
29) 井上前掲書、p.254
30) 徳永新太郎『日本人の行動と思想 43　横井小楠とその弟子たち』（評論社、1979 年）、p.35
31) 圭室諦成（新装版）『横井小楠』、（吉川弘文館、1988 年刊）、pp.118-119
32) 源了圓「幕末・維新期における『海國圖志』の受容：佐久間象山を中心として」『日本研究』（国際日本文化研究センター、1993 年）、pp.13-25
33) 尾佐竹猛『増補　維新前後に於ける立憲思想』（前編）（邦文堂、1929 年）、p.20
34) 源前掲論文、pp.15-16, p.24
35) 同論文、p 17
36) 同論文、p 18
37) 同論文、pp.18-19
38) 徳永前掲書 p.35
39)『日本の名著 No.30　佐久間象山　横井小楠』（中央公論社、1968 年）p.319
40)『改定　福沢自伝』（岩波文庫、1978 年）pp.99-100、p.336.
41) 同書、p.117